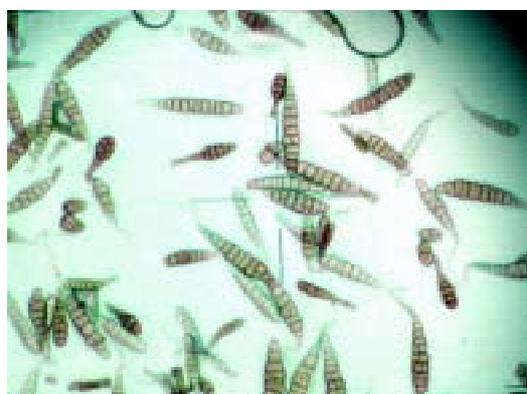


黒斑病 *Alternaria leaf spot, Purple blotch (Alternaria porri)*

葉枯病 *Leaf spot, Leaf blight (Stemphylium botryosum non)*



黒斑病 (*Alternaria porri*)

葉枯病 (*Stemphylium botryosum non*)

黒斑病菌の分生子

葉枯病菌の分生子

検鏡での比較

【見分け方】

葉に縦長の輪紋を伴った黒褐色の病斑を生じる。 始め灰白色、長楕円形の病斑を生ずる。湿度の高いときは水浸状になるが、乾燥すると乾いて枯葉色の病斑になる。病斑の中央部に淡黒色ないし黒褐色の同心輪紋が現われ、輪紋上に淡黒色のすす状のかびを生ずる。病斑が生じた葉は折れやすくなる。近年、葉枯病との重複感染が多くみられる。黒斑病と葉枯病は病徴が類似しており、見取りでの区別は難しい。葉枯病防除は黒斑病に準ずる。

【発生生態】

黒斑病菌はかびの一種で、分生子のみをつくる。病斑上に生ずるすす状のかびは担子梗と分生子である。病原菌は被害部で菌糸または分生子の形で越冬し、翌春病斑を形成し、これより再び分生子を生じて飛散伝染する。発病適温は24～27 で、8月から9月の高温期に被害が多くなる。夏期の高温で草勢が衰えると発生しやすい。ネギアザミウマによる食害痕からの感染が多発の一因になるため、7月下旬にネギアザミウマとの同時防除を行う。

